

心のふるさとを木版画に

野田の昔ながらの街並みに魅了され、歴史のある風景やくらしの中に根付く美しさを木版画に残して40年。木版画の地井紅雲さんちいこううんに、次世代に残していきたい大切なものについてお話を伺いました。

木版画と出会って

「私と木版画との出会いは、高校2年の時でした」と懐かしそう

に振り返る地井さん。出身地である北海道・室蘭で棟方志功の展覧会が開催され、「日本民藝協会みんげい員であった父親に連れて貰ったんですが、そこで人生が大



下根の香取神社で毎年11月23日に開催される下根獅子舞と棒剣術(市指定無形民俗文化財)

きく変わりましたね。棟方志功先生は、当時すでに世界的な版画家になっていました。が、高校生の私にも気さくに話していただけ、人間味あふれる温かさ、ものごとに純粹に感動する心、全てのものを前向きにとらえる感性に魅了されました」と振り返ります。

地井さんは、その後上京し大学

を経て造船エンジニアとして働きながらも、高校の時に感動した木版画が忘れられず、棟方志功のもとで学ぼうと訪ねたところ、「自分は美術教育を受けていないので技術を教えてあげられない」との理由で、仲間の末華さんまつかを紹介され、門下として必死に技術を学んだそうです。

野田の風景に心惹かれて

技術を習得し、棟方志功からも

「紅雲」の画号をいただき、30歳代から本格的に木版画家としての活動を始めたそうです。

昭和54年には市内に編集部のあるタウン誌「とも」が刊行され、そこで野田の風景版画を発表する場を得たことから、週末には野田のいろいろな場所でスケッチしたそうです。

地井さんは日ごろからくらしの中にある美しさや文化を大切にする感性を大事にし、「以前から週末は絵の題材を探すため、柏や我孫子などの東葛飾地域を散策してましたが、一番心がほっとする風景は野田、関宿でした」と笑顔



木版画家・地井紅雲さん